

草っぱボーイは海へゆく。

とびたつな

人物 6人

ボーイ／性別年齢ともに不詳の草っぱの子

ガール／性別年齢ともに不詳の草っぱの子

ママン／性別年齢ともに不詳の草っぱの支配者

テントマン／性別年齢ともに不詳の砂浜の住人

メモリ／性別年齢ともに不詳の記憶の歌姫

トキ／性別年齢ともに不詳の時間の使者

地の底から湧き上がるような喜びの音楽。

青く光る海の光を受けて少年は立っている。まるで朝の光を浴びている自分を眩しく思うように。おしよせる波音に、少年は恐怖しながらも、真っ直ぐ前を見据える。

少年は祈る。

(僕を生ましめた全てのものに光あれ)

波の音は地鳴りの音に変わる。

ここは草と月の光に守られた楽園。

次に目を開けると、目の前には、4つの花の残骸。

少年はそれを拾う。

ボーイ ひとつ ふたつ みつつ・・・

ママン どうして、からしてしまったの

ボーイ よつつ・・・

ママン 世話しなかったんだね

ボーイ ひい ふう みい

ママン おまつりはできないね

ボーイ よ・・・

ママン お前の花が咲かなけりゃ、おまつりはできないよ

ボーイ ワン ツー スリー

ママン 世話の焼ける子だね。いくら数えてもお前が育てた花は4つ。それも、この世界が始まってから初めて見るようなグロテスクな花。

ボーイ イー アル サン スウ

ママン 次に咲くのを待ってるよ。

ボーイ いち にい さん し。死。僕は多分このまま、花も咲かせず死ぬんだろう。そしたら誰か、僕に南無阿弥陀仏って言うってください。

少年は花を見つめる。そしてそれを食べてしまう。

ガール おまつりがくだらないって思い始めたのはいつからだっただろう。おまつりなんかより、もっと違うものが見てみたいって思うんだ。もっと違うものが何かって？そうね。あたし多分、海が見たい。行って来ます。この草むらにさよならを告げる。うっそうと茂る草はあたしにはもう邪魔でしかない。あたし、この草むらで守られてるほどもう小さくないわ。行って来ます。夕飯までに帰らなかつたら、二度と草むらの土を踏まないものだと思ってちようだい。よろしく。

ガール、寝転んでるボーイを見つける。

ガール 何だこりゃ。

ボーイ 南無阿弥陀仏って言ってください。

ガール 殺されたいの？

ボーイ アーメンでもいい。

ガール 自殺志願？

ボーイ 枯れた花を食べたらおなかが痛くなった。苦しみつづけるくらいだったらいっそのまま・・・

ガール 正露丸は飲んだ？

ボーイ うん、500粒飲んだよ。

ガール 馬鹿みたい。このままそこで死んじゃえば？

ボーイ うううくくく

ガール 大丈夫？

ボーイ うううくく僕は全てに見放された人間なんだくく

ガール 馬鹿みたい。

ボーイ　花は育たないしママンには見放されるしおまつりはできないし。通りすがりの君には見殺しにされるし。僕の人生、きつとこのまま真っ暗に終っちゃうんだ。

ガール　この草っぱにいる限り、人生真っ暗に決まってるわよ。

ボーイ　何でさ

ガール　うっそうと茂ったこの草っぱに、太陽の光が射すつていうの？

ボーイ　ここには月があるじゃない

ガール　暗すぎるのよ。あたしが今欲しいのは日光と水分。あんたの花だって、日光を当ててやらなかったから育たないんだわ。幸せになりたいんだったら、草っぱを出て行けばいいのよ。

ボーイ　・・・きみ、誰？

ガール　名前を聞いているの？

ボーイ　うん、そうかもしれない。

ガール　名前はない。あんたがつけてよ。

ボーイ　何でさ

ガール　さあつけてよ。

ボーイ　女の子だから・・・ガール。

ガール 短絡的ね。もっと工夫しないの？まあいいか。あたしはガール。あんたは？

ボーイ え？僕？僕は・・・ボーイ

握手。

ボーイ これからどうするの？

ガール 逃げるのよ。(と、ほっかむりを出し、渡す)

ボーイ 逃げる？

ガール だってつかまったら困るでしょ？

ボーイ 誰が僕らをつかまえるの？

ガール そりゃ、ママンだよ！

ボーイの手をとり逃げ出すガール。

★★★

トキ　　いよいよ時が来る。奴らがこの俺ツチの存在に気づいて、俺ツチを動かす日は近い。そのとき、この地鳴りはどんなに大きくなることだろう。

★★★

ママン　　坊やが出て行った？

トキ　　ええ、そのようで。女が一人現れて、「日光と水が欲しい」って言って坊やを連れて出て行ったよ。

ママン　　止める者はなかったか

トキ　　誰一人としてなかったよ。あんたの坊やは少し、迷っていたようでもあったけど。それでも出て行った。日光と水を求めて。

ママン　　お前が何故止めなかった。

トキ　　止める必要がないからさ

ママン　　何事にもトキがある。あの子はまだ、出て行くトキではない。連れ戻せ。

トキ　　やなこったい。

ママン　　ならば私が連れ戻すまで。

★★★

ボーイ どこまで逃げるの？

ガール どこまでも

ボーイ 日光と水はどこにあるの？

ガール 海にあるのよ

ボーイ 海ってどこなの？

ガール それはきつと・・・世界の終りよ

ボーイ 世界の終り？

地鳴りが聞こえてくる、大地が裂けている。

ガール この音、この音の先にきつと海がある。

ボーイ 音？

ガール ほら、耳を澄まして。聞こえてくるでしょう？

ボーイ 聞こえる、聞こえる、聞こえてくる…

ガール ごおお、ぐおお、叫ぶように呼ぶように、声のように音楽のように

ボーイ その音楽の隙間から、聞こえてくる。チクタク。チクタク。

ガール チクタク。チクタク？

ボーイ チクタクチクタクチクタクチクタク…

+ガール チクタクチクタクチクタクチクタク…

+トキ チクタクチクタクチクタクチクタク。

ガールとボーイ、トキに気づき、見ない振りをする。

ガール 見ないフリをしよう。気づかないフリをしよう。

ボーイ あいつに気づいたが最後、人生を急かされる。まっくらな僕の人生が、光を見ずに終わってしまう。

ガール あいつに気づくと人生がもたつく。進みたいのに、あいつに足をとられてしまう。

ボーイ あいつより後ろに行けない。

ガール あいつを超えることができない。

ボーイ 耳をふさごう！

ガール 何も聞こえない！

トキ チクタクチクタクチクタク

+ガール チクタクチクタクチクタク

+ボーイ チクタクチクタクチクタク・・・

時計の音は更に高鳴る。

ガール やめて

ボーイ やめてくれ

トキ ようやく気づいたかい。ようやくトキがやってきた。
俺ツチの出番だ。

ボーイ 逃げよう。

トキ そいつは無理だ。

ガール 無視するんだ。

トキ そいつは無理だ。逃げようとすればするほど、無視し

ようとすればするほど、身の上に降って来る。それが、時間さ。気づいた時間を無視することは出来ない、とすれば、時間の使者たる俺ツチを無視することはできない。

さあて、お待たせしました。壮大な、いや、ちっぽけな、ドラマの始まりです。昨夜誰かが見た夢の続き。隣のあいつがしている妄想。なんてことない話さ。よくある話さ。ブラックコーヒーを運んできたウエイトレスがついつい口にした独り言。ついさっきまで起きていた心の中の葛藤。

今、時間が動き始めた。

そこは何やら不気味な空間である。空はどんよりと曇り、光らしい光を見ない。ただそばにはテントがあり、なんとか生活はできる程度の場所である。曇っているが雨はなく、水はない。

トキはただ風に遊び、テントマンが料理のしたくをしている。

地図を見てうなっているボーイ。「ここかな？でもなあ」と呟きながら。

ガール、戻ってくる。

ガール 何にもなかった。

ボーイ どこまで行ったの？

ガール 草っぱのはじめの一本が見えるところから、ずっとまっすぐに。でも海はなかった。途中で諦めて戻ってきちゃった。

ボーイ やっぱりさ・・海なんてないんだよ。地図にも海は載ってないじゃない。ガール、僕たち草っぱに戻った方がいいんじゃないかな

ガール 馬鹿なこと言わないでよ。海が見たいのよ。あんただって、その種が育つ場所が欲しいんでしょ？

ボーイ そうだけど・・でも僕やっぱり、あの草っぱで良かったんだと思うな。僕が世話しなかったからだから変な花になっちゃったんだよ。

ガール じゃ、この「砂」はなんなのよ。土じゃない、この、サラサラの「砂」があるってことは

ボーイ 砂しかないじゃないか

ガール そうよ。砂しかないのよ。だからここは「砂浜」なんでしょ？砂浜の近くには、きつと海があるはずだわ。ね、おじさん！

テントマン ブーブ

ガール ほら、ブーブって言った。

ボーイ ブーブって何だよ。

ガール　　わかんないけど、「イエス」とか「はい」とか「ウイ」とか、そういうことでしょ。

テントマン　　ブーブ

ボーイ　　僕にはわかんない！きみが草っぱに帰らないって言うなら、僕たちこのままここにいろしかないじゃない。

ガール　　一人で帰ればいいじゃない。

ボーイ　　だってそれは

ガール　　怖いの？弱虫。臆病者。ちんくしゃ。

ボーイ　　何さ。暴力人間、暴れん坊、それからえーと

と、チーン！と音。

トキ　　あ、腹時計。何か食べましょか。

テントマン　　ダゲー

テントマン。できあがったおやつを出す。海の産物のような、草に隠れて生きるような生き物の蒸し焼き。

トキ いただきます

ボーイ おうちに帰りたい・・・

ガール 帰れば？

トキ やだやだ。ケンカしちゃ、やだあ。

ガール 元はといえばあんたがこんなところに連れてくるからでしょ！

ボーイ そうだよ！きみなんかに会わなければこんなことにならなかったのにさ

トキ おいおい待てよ、そいつは誤解だ。俺ツチがあんたらをここに連れてきたわけじゃない。あんたらは自分でここに来たんだ。時間である俺ツチがあんたたちに何かできると思うX？俺ツチはただ流れていくだけさ。身に覚えがなくなっても、あんたらがここに来たんだ。自分の意志で。

ボーイ 僕は・・・おうちに帰りたい・・・

ガール ・・・ふぎけないで。あたし、こんなことじゃ負けないわよ。何が何でも見つけてやる。足が棒になつて自由がきかなくなっても歩きつづけて、見つけ出してやる。あたしに日光を与える太陽と、水を与える海を。世界の終りを。

ボーイ どこ行くの？！

ガール どこかだよ

ボーイ ・・・行っちゃった。一人だ。一人ぼっちだ。

トキ 一人じゃないよ。俺ツチもいるよ。

ボーイ きみは嫌いだよ。

トキ 酷い。だけど、嫌い嫌いも好きのうち、なんてね。

ボーイ 違うよ！僕はきみが大大大嫌いなんだよ！

トキ だけどあんたと一生つれそうことになるのは他でもないこのアチキ。二人を結ぶこの赤い糸の名は「運命」。おぎゃあと生まれたトキから決められて、これから先もずうつとずうつと

テントマン トメルトキモ ヤメルトキモ

トキ 誓います。

ボーイ ち、ちかいます？

テントマン フウフトシテ アーメン

ボーイ ちよつとちよつとちよつと！

トキ ってことで、アチキたち今日から夫婦しちやいまーす！ついでに夫婦漫才もしちやいまーす！

ボーイ やめてよ！！僕きみといっしょにいたくないんだから！

トキ 成田離婚？

ボーイ そうだよ、成田離婚だよ。きみと僕は連れ添っちゃいけないんだよ。

トキ いや、その逆だ。俺ツチときみは一生一緒に

ボーイ 僕の前から・・・いなくなつてよ。

トキ そいつぁ無理だ。言っただろ。一度意識しちまった時間は無視することが出来ないって。時間ってのは、否応なしに流れていくもんなんだよ。

ボーイ 時間なんて流れてないよ。

トキ 俺を拒否するのか。

ボーイ 時間なんて、僕は知らない。

トキ 一人になるのか。

ボーイ 一人になるよ。きみといるくらいなら。

トキ 「世界の終り」は探さないのか。

ボーイ ……おうちに、帰りたいたいんだよ……

トキ わかった。一人になれよ。

トキ、去る。

ボーイ ……一人になった。また、一人になった。ガール、早く戻ってこないかな。……この砂つてやつは、土みたに硬くなく

ってさらさらで、手でとつてもすぐにこぼれていって、まるでつかみどころがなくなつて、そのくせ、底なしの奥まで僕をしずめようとするみたいに足をからめとるんだ。僕は・・・僕はこのまま、砂に埋もれて、息が出来なくなつて死んでしまうのかもしれない。そしてたら誰か、僕に線香あげてくれるかな。ママは線香あげてくれるかな。

テントマン現れて、砂を掘り返す。砂の中から小さな鍵を取り出す。そしてそれをボーイに渡す。

ボーイ ・・・？

テントマン ユイゴ・・・

テントマン去る。ボーイ、鍵を手にして砂浜を歩き、砂浜に鍵を突き刺す。

メモリの歌声が聞こえてくる。

メモリ あたたかな記憶 よみがえるメモリ トキの狭間で

揺れるココロ

ボーイ、メモリの存在に気がつき、扉を開ける。

ナレーション スナック・メモリにようこそ！ここはあなたの心の疲れを癒す場所。現実には疲れたら、いつでも『いらっしやーい』、どんなときでも『いらっしやーい』。あなたの望む記憶で、あなたをや・さ・し・く包んであげます

めまぐるしく輝く世界。

メモリ あたたかな記憶 やわらかなメモリ まわる記憶
ぶれて かすむ ゆがむ メモリ

あたたかな月の光が射し始め、花の香りをにわかにかけて。

聞こえ出した、おまつりの音。ママンが草むらを祝福している。

ボーイ おまつりだ！

クロス（クロス1||トキ、クロス2||ガール、クロス3||テントマン）が現れる

ボーイ、草の冠を被り、美しい花を手に携えてママンに近寄り、ママンに花を献上すると、甘える。

ママン 綺麗な花ね

ボーイ うん。僕ががんばったんだから。

ママン ごほうびは何がいい？

ボーイ ママンとずうっと一緒にいたい。

クロス1 美しきかな、親子の愛。ところで東静岡公園にある母子像の噴水は、子どもの口から水が出てるんですよ。

クロス2 悲しきかな、親子の愛。その母子像の子どもが、まるで母親から離れようともがいているように私には見えた。

クロス3 だが未だ、かの子どもは無知なりき。己の草むらを、己の花を知らない。

ママン 次のおまつりもたくさんの花を咲かせてね。

ボーイ 咲かせるよ。この草っぱ、いーっぱいの花を咲かせるよ！

コロス1 ママンさん、お便りです。

ママン 読んで。

コロス1 カツオです。ママン、元気ですか。僕は元気です。
この前、僕の花が種をつけました。送ります。いつかママンの大地
に咲くことを祈って。これが、同封されていた種です。

ママン、種を受け取りバツと蒔く。

カラフルに色めく世界。

ママン 相変わらず個性的だ。

コロス2 トウルルル、トウルルル、ママン、お電話です。

ママン 出ましょう。

コロス2 タラオです。

ママン タラちゃん。花は咲いた？

コロス2 まだです。でも芽がたくさん出たです。もうすぐ
花も咲くです。

ママン そうか。そいつは楽しみだ。

コロス2 はい。楽しみです。さよならです。

ママン、電話を切る。

コロス3 ランラランランランララララランララン
ランラララララ（デイズニーの音楽）。ピ。メールが来ています。ワ
カメからです。

ママン 読んで。

コロス3 ママン、元気ですか。あたしは元気です。この前
花が咲きました。珍しい花です。写真を添付するので、どうぞ見て
ください。これが、その写真のようです。

ボーイ ウツ。

ママン 素晴らしい！

暗転。写真が映る。

ナレーション この花は、ワカメ大陸で生産された、パンツ・
フラワーです。パンツ・フラワーの特徴は、新品・未使用・ワコー
ル、の3点です。実が熟しますと、このように、身にスカートから
パンチラした状態となり、ありし日のワカメが楽しめます…

ノイズが交じり、明るくなると、砂浜から頭だけ出された小さなテレビ（プロジェクタでも良い）である。

そのテレビを掘り起こしたテントマンと、それをじっと見ていたボーイ。

ボーイ ねえ・・・

テントマン ?

ボーイ ……きみってさ……一体何者なの？僕にスナック・メモリへの鍵をくれたのもきみだ。この機械を掘り出して、僕にワカメの花を思い出させようとしているのもきみだ。きみは一体何者なの？

テントマン ジョイヤ、ダーン？

ボーイ ……？

テントマン ジョイヤ、ダーン

テントマン、不敵に微笑み、去っていく。

ガールが探しつかれて現れる。

ガール どこだー?! 「世界の終り」や、出て来ーい! 草むらの世界でいつもママンが歌っていた子守唄。その中には「世界の終り」が隠れていた。この地鳴りの向こうに、そいつはきつとあるんだろう。この地鳴りの向こうには海と太陽もあるんだろう。それなのに、たどりつけないのは何故だろう。歩いてても歩いてても止まっても、あの海のニオイにはたどりつかない。世界の終りは見えてこない。いつかはたどりつくのかな? だとすればそれは一体いつなんだろう。時間なんて飛び越えて、あたしは今すぐ「そこ」に着きたい! どこかにタイムマシンでも転がってないかしら、ねえボーイ。

ボーイ タイムマシンはないけれど、この砂の中に「スナック・メモリ」への鍵は埋まっていたよ。

ガール スナック・メモリ? 意外と不良なのね

ボーイ 違うよ。僕が泣いていたらテントのおじさんが砂の中からこの鍵を探し出してくれた。この鍵で、僕は僕の会いたい記憶に会えるんだ。

ガール あんたの会いたい記憶? 草っぱの記憶?

ボーイ そうだよ、草っぱの記憶。そしておまつりの思い出。聞こえてくるのはママンの子守唄。あたたかな布団のような緑の草っぱに、いーいっばいの花。月の光がやんわり射して、僕らはみんな楽しい歌を歌うんだ。きみにも見せたげる。おまつり好きだろ?

ガール 昔はね。

ボーイ じゃ、見に行こう。

鍵を砂に刺そうとしたボーイから鍵を奪うガール

ガール 昔の話よ。今はおまつりなんて退屈なだけだわ。それに、その思い出があんたに何してくれたのよ

ボーイ メモリの中では、僕は一人じゃない。みんながいるよ。寂しくないし怖くないよ。

ガール だけど、あたしはそんなの求めてないの。あたしが見たいのは思い出じゃない。世界の終りが見たいのよ。

ボーイ 世界の終りって何だよ

ガール わかんない

ボーイ それを見てどうするの

ガール わかんない

ボーイ わかんないのに行くのかい？

ガール わかんないから行くのよ。さあ！

ボーイ そこに花は咲いてるの？

ガール わかんない

ボーイ そこにおまつりはあるの？

ガール わかんない

ボーイ わかんないの？

ガール わかんない

ボーイ だったら僕は行きたくないよ

ガール でも行くのよ。行かなきゃなんない。

ボーイ どうして？

ガール そこに海があるからよ

ボーイ 海？海ってなんだい？

ガール さあね。さあ行け。いざ行け。左右確認，ヨシ，ヨシ。前後確認，ヨシ，ヨシ。砂で囲まれたこの世界から，海のニオイを探し当てよう。

ボーイ 海は絶対あるのかい？

ガール あるんだよ

ボーイ 見たこともないのに？

ガール あるんだよ

ボーイ わかんないのに？

ガール あるんだよ

ボーイ もしもなかったら？

ガール あるんだよ

ボーイ だけどなかったら？

ガール、砂の中からハンマーを取り出して

ガール この大地を叩き割って、その裂け目から探しに行く
までよ。

ボーイ そんなことしたら大地が血まみれになっちゃうよ

ガール そうよ、そのときは大地は血まみれになって世界は
終りを告げる叫びをあげて狂っちゃうのかもしれない。

ボーイ 大地がかわいそうだ

ガール 仕方ないわ。だってこれは革命だもの。革命のとき
にはいつだって、大量の血が流れるものよ。

★★★

ママン 花カマキリ

トキ なんだいそれは

ママン 花のような色形をしてはいるが、実はカマキリだ。天敵と、えさを惑わすためにその姿を手に入れた。花の蜜を吸いに来た弱い小さな虫をその大きなカマで殺して食べる。あの女はまさに花カマキリだ。

トキ あの女つてのは、ガールのことかい

ママン そう呼ばれている。坊やをそそのかし、ここから連れ出そうと目論む女。

トキ するつてえと、その花カマキリの天敵はママン、あんたつてところかな？

ママン あるいは私はえさかもしれない。そして、あの女が飲み込もうとしているものは私だけではない。

トキ 誰だいそれは

ママン 坊やもだ

トキ あの女はそんなに悪い奴か。

ママン 悪い奴かどうかはわからないが、坊やを破壊することはできるだろう。

トキ じゃあ、あんたはいい奴なのかい

ママン　いい奴かどうかはわからないが、坊やを助けるためならば何だってしよう。

トキ　・・・何をするんだい？

★★★

ボーイ　まだ歩くの？

ガール　どこまでも歩くのよ。

ボーイ　くたくただ。

ガール　くたくたでも歩くのよ

ボーイ　スナックメモリに行きたいな

ガール　ダメよ，絶対ダメ

ボーイ　鍵ちょうだい。

ガール　ダメだつてば。あんなところに行ったら，ママンの思い出に食べられちゃうのがオチだわ。

ボーイ　思い出が僕を食べるの？

ガール　ママンがあんたを食べるのかもしれない。

ボーイ ママンが僕を食べるの？ママンは、この世界の支配者だよ。そんなことしないよ。

ガール 支配者だからよ。

ボーイ きみはママンが嫌いなの？

ガール 大嫌い。あんただってそうでしょ

ボーイ 僕はママンが大好きだ

ガール そんなこと言ってるからママンに食べられちゃうのよ。

ボーイ 食べないよ。きみなんか海に食べられちゃえ。

ガール 海はあたしを食べないよ。

ボーイ なんです。知りもしないのに、そんなことがいえるの？

ガール 海はあたしを食べない！海は、明るくって目がくらみそうな太陽の光のもとで、さざ波を打ちながらただあたしたちを待ってる。さあ、歩きなさい、歩くのよ。

ボーイ でももうクタクタなんだ、本当さ。君だってそうだろう？

ガール 歩かないつもり？

ボーイ ばたっ、倒れた、もう歩けない。

ガール 言ったでしょう。革命には血が付きもの。あたしの革命を邪魔する気なら、ハンマーは大地を破る前にあんたの脳髓を破るわよ。

ボーイ 僕、邪魔する気なんてない

ガール でも実際邪魔なのよ

ガール、ボーイににじり寄る。

と、そこへバスのクラクション。「プップー」

ボーイ あっ、バスだ。

ガール どうして？こんなところに・・・

ボーイ 運転手さん、僕も乗っけてくれないか

運転手 行き先はどこだい？

ボーイ どこでもいいよ

運転手 あいよ

ガール 違うわよ。運転手さん、海。海に連れて行って。

運転手 海かい。あいよー。

ガール・ボーイ、バスに乗り込む。

ボーイ、心地よさに眠り始める。

ガール　　ちよつと……。寝ないでよ。

運転手　　お嬢さんも眠っていいんだよ。

ガール　　あたしはこの目で海までの道のりを見届けたいの。

運転手　　・・・お嬢さん、どうしても海に行きたいんだね。

ガール　　そうよ。

運転手　　どんなとこだか知ってんのかい

ガール　　太陽の光がさんさんと射して、さざ波が寄せては返して、あつたかくて

運転手　　あんた、若いね。

ガール　　え？

運転手、バスを止める。

ガール　ちよつと！

運転手　進路変更，戻ることとしよう。

ガール　どうしてよっ

運転手　あんた，海っていうものを知らないね。

ガール　それが何よ

運転手　甘く見ると怪我をするよ。いや，怪我だけですめばいいが，命を落とすよ

ガール　危険を恐れてたら革命は成し遂げられないわ。

運転手　革命か，ずいぶん大きく出たもんだ

ガール　大きな問題だもの

運転手　そんなに行きたいのかい

ガール　どうしても。お願い。

運転手　連れて行けないことはない。

ガール　本当？

運転手　だが，そのためにはお嬢さんに絵の才能が必要だ。

ガール　絵？どうして？

運転手　　今昔東西を問わず、人間の発展に絵はつきものだ。革命だったら尚更だ。絵画にならない革命を探す方が難しい。さあ、描いてご覧。

運転手、ガールに筆を渡す。

ガール　　キャンバスは？

運転手　　そこらへんにあるだろう

ガール、キャンバスを探す。しかしない。

ガール　　ない

運転手　　じゃああなたには行く資格がないってことだ。

ガール　　ある、ある、あったわ。ここに

ガール、空を指す。何もない。

ガール 絵の具・・・

運転手 ないならあんに資格は無い

ガール 絵の具、は、これよね。って言ったのよ

だがそこにはやはり何も無い。

ガール、空に絵を描く。

だが、キャンバスがない。

何を描いているのか自分でもわからなくなってくる。

運転手 なんだいそれは

ガール 海よ

運転手 どこが海なんだい

ガール 青い海よ

運転手 全然海なんかじゃないよ

ガール 広い海よ

運転手 馬鹿な。

ガール 海よ

運転手 青い海？こんなにどんより曇った空が？広い海？こんなに重く立ち込めた雲が？どう見たってこれは空だ。俺の目はよっぼどの節穴らしい。あんたの芸術がこれっぼっちもわからない。それともあんたの目が節穴か・・・あんたに才能がないか。

メモリの歌声が聞こえてくる

メモリ 見えぬ 未来 時を越えて 覗くことができたならば 見えぬ 未来 何もできぬ 記憶に遊び 記憶に眠れ

ガール キャンバスがない・・・

運転手 まだ早いんだ

ガール 絵の具だつてない

運転手 今はゆっくりお眠り。

ガール ……あなたは誰？

運転手 ママンだよ

ママン、ガールを抱き寄せる。ガールは眠る。

トキ、姿を見せて

ママン 残念だな。

トキ まったくだ。こんなに簡単にくじけちゃうなんて。

ママン この子たちにはまだ、私のもつとで、色々教えてやらねばならない。幼すぎるのだ。

トキ ワカメは元気か

ママン そのようだ

トキ カツオは元気か

ママン それがどうした

トキ 人間ってのは、独り立ちしていくもんなんだ。自分の世界を見つけてそこで暮らしてくもんなんだ。

ママン お前はそこに口を挟む立場か？私と、この子たちの問題だ。お前はただ流れていけばいいんだろう

トキ そーさ。俺ツチはトキ。ただ流れるんだ。だが、悲しみも、喜びも、全ては俺ツチとともにあるんだってことは忘れずにね、御仁。

トキ、流れるように去る。

ママン、ガールを抱えたまま去ろうとすると、テントマンが追うように現れる。

ママン お前は誰だ

テントマンは深々と礼をして、服の中から拳銃を出す。

ママン 誰だ！

テントマン、空に向かって銃を撃つ。

音に驚いてボーイは飛び起きる。

ママン ・・・気をつけなさい。危うくお前は、この世界の
主を殺すところだったんだぞ。

ママン、ガールを抱えて去る

ボーイ ママン！・・・ガール。つかまっちゃったの・・・？

テントマン ブーブ

ボーイ ガール・・・ガールは草むらに行くのかな

テントマン ブーブ

ボーイ 僕は・・・草むらに行かないのか・・・？どうして
ママンは、僕じゃなくなってガールを連れて行くの。どうしてきみは、
僕を起こしちゃったの

テントマン、道に落とされたバスのハンドルをボーイに渡す。

ボーイ ・・・僕はどこに行くんだろう

ハンドルをまわすと、そこは「ねむり姫」の世界

トキ きみが選んだお話はこれだね。「ねむり姫」

ボーイ 眠り姫？

トキ 草っぱに戻ろうとするきみが選ぶのならば、「ものぐさ太郎」かもしれないなあ、と思っていたが。「ねむり姫」とは実に象徴的だ。で、きみは誰をやるんだい？

ボーイ やるって？何のことさ・・・

トキ なに言ってんだよ、役者だね。だから、「ねむり姫」をやるんだろ。準備はできているよ。

ボーイ あ！ママン

トキ ママンじゃない、あれはこの国の王様だ

ボーイ だけど僕のママンだ

トキ 王様だよ

ボーイ あ！テントの人

トキ あれはこの国の精霊だ。王様に呼ばれてるんだよ

ボーイ ……ガール

トキ あれもこの国の精霊だ。王様に呼ばれたんだ。

ボーイ　　どうして王様に呼ばれるの？

トキ　　きみ、なにひとつわかつちやいないね。王様に待望の子供が生まれたのさ。きみは、その子供が幸せになるように魔法をかける、精霊の役だろう

ボーイ　　そっか。そうだったかな。

ボーイ、ママンに近づこうとして、

ボーイ　　きみはいいのかい？

トキ　　俺ツチかい？・・・呼ばれてないみたいだからねえ・・・だが魔法をかけてあげるとは必要だ、お子さまの幸せのためならね。後で行くことにするよ。

ボーイ　　そっか。じゃあね。

★★★

ママン　　この子に勇気を。勇気を与えてくれるのはどの精霊だ

ガール　　ここに。王様。

ママン さあ魔法をかけなさい。

ガール とおー（魔法をかける）。この子に、勇気を、そして力を。いかなる困難にも立ち向かう創造の勇気と、いかなる困難も打ち砕く破壊の力を、与えます。とやー！

ママン 勇気と力がこの子を育てるだろう。では知恵は。知恵を与えてくれるのはどの精霊だ。

テントマン 私で。

ママン さあ魔法をかけるがよい。

テントマン （魔法をかける）。この子に知恵を、そして理性を。いかなる困難をも解決する知恵と、いかなる困難にも対処する理性を、与えます。えい。

ママン 知恵と理性がこの子を育てるだろう。では最後の魔法にうつろうか。

ガール あの魔法がまだですが

ママン あれは必要なだろう

テントマン しかしあの魔法がないと

ママン 必要ない

トキ いや必要だ。喜びも、悲しみも、すべてはそれとともにある。

ママン トキ

トキ　この子に時間を。いかなる時も連れ添うことになる永遠の人生の伴侶。誕生、幼児期、児童期、思春期、モラトリアム、中年期、そしてこの子に死を与える、時間を私は与えます。

ママン　何をする

トキ　えい。

時間が流れ始める。

トキ　さあ、たった今、ようやくこの子は生まれたんだ。

ママン　この子は・・・これからずっと時間に怯えて暮らすのか。

ガール　いつも怯えてばかりいるわけじゃないわ

ママン　だが、時間を恐れなくなったら・・・今度はワカメやカツオの時と同じように、ここを出て行くんだ

テントマン　そして新たな大陸を築く。

ママン　この大陸から、子供がいなくなっていく。愛し、花を愛でるように愛でて育てた子どもが・・・

トキ　それを人は「巣立ち」という

テントマン　もしくは「自立」「独立」

ガール 「旅立ち」

ママン 外は危険だ。ワカメもカツオも、危険と隣り合わせながら生きているんだ。

トキ 生きていてそして死ぬ

ママン 私の元で守ってやらなければ・・・呼吸の仕方かわからなかったはずなんだ

トキ 子どもたちを守るあんたもいつか死ぬ

ママン そのとき・・・この大陸はどうなるんだ

ボーイ ……王様

ママン 魔法で・・・魔法で何とかできないのか

テントマン 王様、時間の魔法だけは解けませぬ。だが、それを和らげることはできません。そのために・・・最後の魔法は存在するのです。

ママン 魔法を・・・最後の魔法をかけてくれ。この子に。この子が幸せに生きていくために。

ボーイ 最後の魔法・・・僕がかけるのか

トキ どうした。かけられないのか。

ボーイ 最後の魔法って・・・何だ。

トキ 自信がないのか。

ボーイ わからないんだ

トキ お前は知ってるはずだ

ボーイ 最後の魔法・・・

トキ それがあるから・・・お前は生きていけるんだろう。

ママン 知っているんだろう。魔法をかけてくれ。この子に・・・私に・・・

ボーイ ……忘却の魔法。いかなる苦しみも忘れてしまう、忘却の力を、この子に。そしてあなたに。

メモリが見える。

メモリ ねむれ ねむれ 母の胸に ねむれ ねむれ 大地
の中で 世界が終るとき大地は裂けて 世界が終る時 大地は生ま
れる ねむれ ねむれ 大地の胸に ねむれ ねむれ 母の中で

ガールはママンの胸に抱かれて眠り始める。

ボーイ、一緒になってママンの胸にとびこむ。

トキ　かくして、子供と王様は長い間トキを忘れて幸せに暮らす。いつかやってくる運命の時までは。

ボーイ　魔法は、これだけだったかな

トキ　子供は、愛情をという栄養を注がれることを待ちつづける、植物。何もせず、口をあけて待っているだけで栄養は注がれた。

ボーイ　思い出せないな・・・お習字みたいに手本があればいいのにな。お芝居みたいに台本があればいいのにな。そうすれば忘れないのに。

トキ　やがて花は美しく咲く。ママンのために美しく咲く。そしてやがて種をつけ・・・種はどこにいくのかな？

テントマン、理科の教科書をボーイに渡す。

ボーイ　身の回りの植物、たんぽぽ、風に吹かれて綿毛をとばします。遠くまで遠くまで飛ばします。一人でも生きていきます。まつぼっくり、枝から離れて運ばれます。水辺の植物、マングローブ。親のそばで育ち、水が満たす時期になると、水の流れにのって親を離れていく。そして新しい沼地に上陸し、大きくなっていく・・・そこには苦勞もあるでしょう、そこには苦しみもあるでしょう、ですが、子孫繁栄のため、生きていくのです。新たな土地で生きていくのです。

トキ とっても有益な、理科の授業でした。

ボーイ マングローブ。親を離れて違う沼地へ・・・

トキ去る。

テントマン、ボーイのそばを離れようとする。

ボーイ きみは誰だ

テントマンは答えない。

ボーイ きみは誰だ

ガールは眠ったまま。

ボーイ　　このお話は何・・・？僕の思い出なの？僕が生まれ
た時なの？・・・最後の魔法って何。

メモリは一切語らない

ボーイ　　きみは何。きみは誰。きみは誰。きみは誰。きみは
誰。

テントマン　　・・・ジョイヤ、ダーン？

ボーイ　　・・・僕は・・・？僕・・・僕は・・・誰だ。

ママン　　坊や

ボーイ　　・・・あなたの子どもは、カツオ、ワカメ、タラオ・・・
僕。僕って・・・何？

ママン　　この草っぱの子。私の子どもだろう。

ボーイ　　僕はあなたの子どもだ。あなたのそばで生きてきた、
あなたのために生きてきた。僕は花を咲かせたくて。

ママン 坊や。今のはただのお話だ。気を取られるんじゃない。

ボーイ お話だ。だけどメモリの奏でたお話だ。思い出が奏でたお話だ。僕の思い出が・・・

ママン 疲れてるんだよ。いっぱい歩いたんでしよう。この世界を。さあ、おやすみなさい。

ボーイ そうだ。いっぱい歩いて、いっぱい歩いて、いっぱい歩いて・・・ガール。きみがそこまでして見つけ出そうとしたものは何だ。この大地をハンマーで叩き割ってまで見つけ出そうとしたものは何だ。僕を殺してまで手に入れようとした・・・それは何だ。

ママン 坊や。ママンの言うことが聞けないのかい。

ボーイ 世界の終りって何だ。海って何だ。海には何があるんだ。海はどこにあるんだ。

ママン 坊や！

ボーイ 僕は誰だ・・・ママン。

ママン 草っぱの、私の子供だろう

ボーイ そうだ、あなたの子どもだ。

ママン どうしたっていうの

ボーイ あなたの子どもだ。僕も、ガールも。あなたに、美しく咲くことを期待され育てられた・・・草っぱの子どもだ。ねえ

ガール。あの日、きみはどうして草っぱを出たんだい？ガール。どうして僕はあるとき、きみについていったんだろう？ねえ、どうして砂浜にはテントのおじさんがいたんだい？僕らはどうしてトキに気付いたのかなあ？

ママンはピエロのお面を被る。トキが陰からその様子を見守る。

ボーイ　　ママン。あなたは僕を、そして世界を生ましめた全ての生命の父で、母で、この世界の支配者で・・・あなたがいれば、何も怖いことなどなかった。あなたのそばで花を育て咲かせることだけが僕の幸福だった。ママン。草っぱで僕らは月の光を見た。耳を澄ませばママンの子守唄が聞こえてきた。僕は幸福だった。あなたといれば、全て世界がそのまま僕のものになっていくような気さえた。ママン。どうして僕の手足はこんなに伸びたのだろうか？草っぱが・・・小さくなっちゃったよ。ママン。どうして僕の背はこんなに伸びてしまったのだろうか？今まで見えなかった、遠くのものまで見えるようになったよ。

・・・水辺の生き物、マングローブ。いつか親の元を離れて・・・

舞台は青くなり、彼はそこに佇むビジョンを見る。

いつか見るビジョン。

波音。太陽の光はこんな海の深くまで！

Life is music

舞台が元に戻ると、ハンドルを手にしたままボーイは佇んでいる。

トキは未だ見守りつづける。

ボーイ ……今、見たものはなんだったんだろう。飲み込まれるかと思った。だけど…あれが…海なんだろうか。あれは、海なのかい？

テントマン ……？

ボーイ わかんないよね。

テントマン ブーブ。

ボーイ ……さっきの、眠り姫のお話。あれはホントなのかなあ。僕はホントに、生まれたときに、魔法をかけられたのかなあ。あの…トキにさ…。

テントマン ……ブーブ

ボーイ 僕はどうすればいいのかな？

テントマン ……。

ボーイ . . . 。

内に流れる音楽に耳を寄せる。

ボーイ . . . 旅を . . . 続けよう。

テントマン ブーブ。

ボーイとテントマンは歩きつづける。

テントマンが差し出した水をボーイは飲む。

少し疲れて、テントで寝る。

また目覚めて歩き始め、砂の中に忘れ去られていた地図を見つけて、
地図からここを探そうとする。

ボーイ どうして、地図にはこの砂浜が載ってないんだろう。

テントマン ドード

ボーイ え . . .

テントマン ドード

テントマン、地図を破る。

地図は砂に交じる。

ボーイ . . .

それからまた旅を続ける。

ボーイは砂の中から破片を拾い、見つめ、透かし . . . また歩き。

ボーイ あっ

ボーイは砂浜の中から一枚の花びらを見つける。

テントマン ?

ボーイ これ . . . あれに似てる

テントマン ゲー

ボーイ パンツ・フラワーの花びら。どうしてこんなところに・・・

テントマン ーン？

ボーイ もしかして・・・この砂浜は、全ての世界につながっているのかな。

テントマン ーン・・・？

ボーイ ……カツオの花の種もある。

ボーイはしばし考えて、

ボーイ ガールを・・・呼びに行こう。

テントマン ……ダイヤ？

ボーイ 簡単さ。スナックメモリに行くんだ。鍵は・・・

ボーイ、砂の中から鍵を掘り当てる。

ボーイ 鍵はここにある。

テントマン ……ユイゴ？

ボーイ ……だって……最初に、海を目指しだしたのは
ガールなんだ。ガールがいないと、僕は何の答えも見つけられない。

テントマン ユイゴ？

ボーイ ユイゴ。

ボーイ、砂浜に鍵を刺す。

My Last Party

と、おまつりの音が聞こえてくる。

花火が打ち上げられて、夏の夜の様子を呈す。

ボーイ おまつりだ……どこから？

テントマン ……?!

ピエロのママンがあらわれる。

テントマン、図鑑を引っ張り出してきて。ピエロを調べる。

ピエロ やあやあ、坊ちゃん。おむかえにあがりましたよ。

ボーイ きみは誰？

ピエロ あっしはただのピエロでがんす。悲しみと愛情から出来たピエロでがんす。今から始まるおまつりに、坊ちゃんを誘いに来たのでございます。

ボーイ おまつり・・・でも、もう花を咲かせられなくなつた僕におまつりがあるわけがない。

ピエロ あやややや、泣けることをおっしゃらないで。坊ちゃんはこの草っぱの坊ちゃんです。いつか花も咲かせられましょう、その、前祝いといったところで、やんす、で、がんす。

テントマン ドード

ボーイ ・・・おじさん

ピエロ なんでがんすか、なんでがんすか。その図鑑は。こんな楽しいときにお勉強なんて、つまんなあい。やめちゃいませよ、やめちゃいませよ！ボーイ（投げ捨てる）

テントマン ドード！

ボーイ 何てことするんだよ！

ピエロ どうして坊ちゃんが怒るんで？今から始まる楽しい

おまつり。遊園地が来てるですよ。行きたかないですかい？

ボーイ 遊園地？

ピエロ 回転木馬、ジェットコースター、コーヒーカップ。何でもござれ。さあ行きたかないですかい？

ボーイ ……ちよつとくらいなら…行ってもいいかな。

テントマン ……。

テントマンは去る。

ボーイ あ！おじさん…！

ピエロ あっはっは。邪魔者はいなくなりましたね。さあ坊ちゃん行きましょう、参りましょう。草が支配し、花が咲き乱れるあの楽園へ。おまつりへ。

ピエロはボーイをオンブ。

ピエロ まずはどこがいいですかい？

ボーイ 回転木馬…コーヒーカップ…そうだなあ。

トキ いらっしやい、いらっしやい。お客さん。こちらは大観覧車。くるり、くるり、くるくるくらくら。まわるまわる、観覧車。どうだいお客さん。乗ってかない？

ボーイ 僕あれがいいよ！

ピエロ 観覧車ですかい？おまかせあれ。

トキ 二名様ご案内！

二人は観覧車に乗り込む。

トキ この大観覧車は世界で一番大きい観覧車。てっぺんからの景観は、見るものを圧倒し、ときには人生すらも変えてしまうといわれています。どうですかお客さん、よく見えますか

ボーイ すごい、すごい！遠くまで、よーく見えるよ。あれが・・・僕が毎日寝ていた布団。草っぱの布団。

ピエロ ごらん坊ちゃん。あれが宮殿だ。この草っぱの主と一緒に暮らした草っぱの宮殿。

ボーイ 懐かしい

ピエロ 懐かしい？おかしなことを言うでやんすね、坊ちゃん。まるで長い間行ったことがないみたいに。

ボーイ ...花壇だ

ピエロ　　そうでがんす、花壇でがんす。坊ちゃんが種を植え、主と一緒に花を育てた、花壇でがんす。

ボーイ　　・・・いつまでも、あのまんまだといいな。綺麗な花が咲いた、あの日のまんまだといいな

ピエロ　　何をおかしなことを言っているでやんすか！！坊ちゃんは、これからもあの花壇に立ち寄って、種を植えて、花を咲かせるでがんすよ。

ボーイ　　いつまでも綺麗なままでいて欲しいな。

ピエロ　　坊ちゃん。あんた・・・おかしなことばかり言うてるよ。折角の楽しいおまつりなのに。折角の大観覧車なのに。

トキ　　さあいよいよビッグイベント、てっぺんに到達いたします。皆様眼下をご覧ください。この世界の何ともまあ広いこと！そして狭いこと！どうぞ、心置きなく、感動してください。

ボーイ　　わぁー！！！

ピエロ　　ああ・・・もう止まってくれ。観覧車・・・

トキ　　止まることはない。この観覧車はいつだって右回りに動きつづけるんだ。時計回りに。

ピエロ　　・・・トキか。邪魔をしおって！

トキ　　俺ツチは何一つ邪魔なんてしちやいない。俺ツチは何一つ手出し出来やしないんだ。ただお前たちが網にかかるとを待っていただけさ。

ピエロ 花カマキリは、お前かもしれないな

トキ さて？あきらめろ。あいつの忘却の魔法はもう解けたんだ。

ピエロ ……そして私の魔法も。

ボーイ なんて……なんて見晴らしがいいんだろう。ねえ、あの茶色いところは何だい？えらく殺風景だな。

ピエロ 茶色いところ？

ボーイ あ！……誰がいる……

ピエロ 誰がいるんだい？

ボーイ んーとね……んーと……あれは……あれは。

ピエロ どうした？

ボーイ ……僕、早くガールを呼びに行かなくちゃ。

ピエロ どうした？！

ボーイ だって……待ってるんだ。あそこで。

トキ てっぺん離れて、ガッタンゴットン。観覧車は終点に近付きます。物語もまた。

ピエロ 誰が……待っているんだ

ボーイ 僕さ。

トキ 右回りに。右回りに。右回りに。右回りに。

ボーイ 僕が・・・あそこで待ってる。砂浜で僕が戻るのを待ってる。

ピエロ 坊やはここにいるだろう

ボーイ だけど砂浜にいるんだ。僕が・・・

ピエロ そんなバカな

ボーイ 海を探しに行くのを待ってるんだ。ガールを呼びに行かなくちゃ

ピエロ あの子はまだ寝ているよ。

ボーイ 起こすんだ。いつまでも寝てらんないよって。

ピエロ どうやって。

ボーイ スナックメモリに行くんだ。

ピエロ どうやって。

ボーイ あの砂浜にスナックメモリへの鍵が埋まってるはずなんだ。

やがて観覧車は終着点に着く。

駆け出そうとするボーイを引き止めてピエロ。

ピエロ　　もっと遊びたいだろう？

ボーイ　　でもさ・・・

ピエロ　　案内人、まだまだあるだろう。アトラクションは山というほどあるんだろう。

トキ　　勿論でござーい。

ピエロ　　さあ、遊ぼう、もう一つだけ、もう一度だけ・・・

トキ　　これなどうかでしょう。トレジャー・ハンター！悪い魔物の力で永遠の眠りについたお姫様を助けてこの世界の宝ものを見つけ出すのです。

ピエロ　　ああ、何でもいい。何でもいい。もうひととき、この子と。

ピエロはお面を外してむせび泣く。

世界は一転、トレジャーハンターが始まる！

トレジャー・ハンター

トキ　　キャー！悲鳴が聞こえ、お姫様がさらわれた！きみはトレジャー・ハンター。世界で一番美しく輝く宝ものを手に入れようとしてるんだ。だが、宝ものを手に入れるためには、どうしても、お姫様の力が必要だ。

ボーイ　　じゃあ、助けに行かなくちゃ。

トキ　　立ち上がった主人公に、悪い魔物からの挑戦状！

ママン　　このお嬢ちゃんをどうしようかね。食べてしまおうかね。私が世界を支配するためには、このお嬢ちゃんが邪魔者なんだ。まあ、良い。今は眠っていてもらう。

ボーイ　　姫を返せ

ママン　　取り返せるものならば、取り返してみたまえ。

トキ　　どうする？トレジャー・ハンター。きみには選ぶ権利がある。彼女を救い出すか。それとも、やめておくか。

ボーイ　　やめることができるの？

トキ　　いつだってやめることはできるさ。ゲームを投げ出したそいつは、諸々の事情があつてやめたことすら理解してもらえず、人生の敗者と呼ばれるけどね。

ボーイ　　でも、ゲームは今始まったばかりじゃないか。

トキ　　いや、まだ始まってなんかいない。こんなのはプロローグ、前置き、前置。芝居で言うなら前説さ。どうする、ボーイ。相手は強敵だ。世界で一番強いんだ。

ボーイ まだ始まったもないなら、やめる必要もない。

トキ 始めるんだね？

ボーイ 始める。

トキ いいんだね？

ボーイ いいよ。

トキ 怖くないかい？

ボーイ 言われたら、怖くなってきた。

トキ やめるかい？

ボーイ でも、もう始まっているんだろう？

トキ そう、もう始まっている。

ボーイ ゲームを続けよう。

トキ YES、SER。魔物と戦うところをかためたトレジャー・ハンター。お姫様を探して旅に出る。片手には世界地図。トレジャー・ハンターには道しるべが欠かせない。

ボーイ さて、次はどこに行ったものか・・・どうしたことか、ここで地図が途切れる。

トキ ご安心あれ、きみにはお付きの賢者がいるんだ。

地面を丹念に調べていたテントマンは、方向を指す。

ボーイ ありがとう、賢者。

トキ トレジャー・ハンターには次々と難関が襲い掛かる。
そう、忘れてはいけない。ヒーローにはつきものの宿命のライバル。
やあボーイ。

ボーイ またきみだ。

トキ また俺ツチだ。

ボーイ 一体何処まで邪魔をする気なんだい

トキ 邪魔なんてしてないさ

ボーイ それじゃ一体何処まで僕につきまとうんだい

トキ それは一生。そう。一生さ。

ボーイ 一生か。長いな。

トキ あっという間さ。

ボーイ やめちゃいたいな。

トキ いつだってやめられる。

ボーイ けどゲームは始まったんだろ。

トキ 真っ最中さ。

ボーイ じゃ、やめないよ。

トキ じゃ、俺ツチもやめないよ。

ボーイ こうして僕はさらに、さらに進んでいく。どうだい賢者、敵のアジトは見つけたかい？

テントマン ブーブ！・・・ダ・・・

ボーイ え！

トキ そこで見つけた、につつき敵の正体は・・・なんとボーイの父親だった。

ボーイ ……パパ。パパが、どうして・・・

ママン お前が・・・あんまりに悪い子だったからさ。花も咲かせられないのに、この世界を出て行こうとした、あまりに悪い子だったから、お前を懲らしめてやろうとしたのさ。

ボーイ ……お姫様を返して。

ママン バカなことを言うな。この子はもっと悪い子だ。お前をそそのかした、張本人だ。

ボーイ それは違うよ、パパ。

ママン 何が違う

ボーイ 違うよ、パパ。あなたは間違っている。彼女がそそ

のかしたんじゃない。自分の意志で草っぱを出たんだ。さあ、彼女を渡して。さもないと僕は・・・旅に出られない。

地鳴りが聞こえてくる。

ボーイ、ママンに近付こうとするが、近づけない。

ボーイ 入れない。どうして・・・

トキ ああ、絶体絶命。万事休す。だが、救われない英雄物語なんて見たかないだろ？

テントマンがメモ리를指す。

ボーイはひらめいて、砂浜から鍵を探り当てる。

メモリ 今始まる 今蘇る 今ここから 今流れる

ママン そんなバカな。ここは砂浜じゃない。

ボーイ そうだ、ここは砂浜じゃない。だけど、あの観覧車から見えたんだ、この鍵が。遠近感がおかしくなるくらいに近くに

この鍵が見えたんだ。そして、僕が望めばそれだけで、これは手に入った。

メモリ さあ見せようか

ボーイ さあ見せて

メモリ 思い出の世界

ボーイ 思い出の世界、いや違うかな。僕の愛した世界。

メモリ 今流れる 今見える 今 明日 今 昨日 今 未
来 今 昔 今

ボーイはママンとガールに近付く。そして、ガールを抱き寄せる。
ガールは目を覚まし、起き上がる。

ボーイ 今だ！

ボーイはガールの手をとり、走り出す。テントマンも一緒になって。
それにしても、これはいつか見た光景を想起させる！

ママン 逃げたか！

トキ 残念だったな。

ママン 何をしているんだ。何故引き止めない。

トキ 止める必要がないからさ。

ママン 必要がない？必要ならば大いにある。

トキ 必要と理由は間違えちゃならない。

ママン ならば理由と言いなおそうか。理由ならば大いにある。

トキ それは何だ。

ママン 私があの子を愛しているからだ。

ボーイたち、走りこんでくる。

ガール どこまで走るの？

ボーイ どこまでも

ガール 日光と水はそこにあるの？

ボーイ ないかもしれない、あるかもしれない

ガール わかってないのね？

ボーイ わかってないから目指すんだ

ガール まだまだ走るの？

ボーイ 疲れるまでは走るんだ

ガール 疲れたらどうするの

ボーイ スナック・メモリで休むのさ。

ガール そうして私たちは海へゆくのね。

ボーイ そうだ。この砂浜から続いている、海にゆくんだ。

ガール 海はどこにあるのかな

ボーイ だから探すんだろう

ガール 私に海の絵は描けるかな

ボーイ だから目指すんだ

地鳴りが響いてくる。

その音は、海鳴りのようでもあり。

ガール　この音。この音だわ。耳を澄ませば聞こえてくる。

ボーイ　僕にも聞こえる。……この音だ。

ガール　叫ぶように、呼ぶように

ボーイ　音楽のように……ママンのように。

ママン　坊や！私の子どもたち！私のもとに戻ってきなさい。
お前たちの生まれ育った大地はここなのだから。

ボーイ、ガール、テントマン、耳を澄ましたまま、ママンの声を聞く。

ガール　その隙間からチクタクチクタク。

ボーイ　チクタクチクタク。

ガール　この音はどこから聞こえてくるんだらう

ボーイ　チクタクかい？それとも、ママンの叫びかい？

ガール　そうね……。両方よ。一体どこから聞こえてくる

んだらう

トキ　その答は、きみたちの旅の続きにありそうだ。

テントマン

ブーブ

トキ
答が出るまで、付き合ってくれてもいいんじゃないの？

ガール
冗談じゃないわよ。ねえボーイ。あんたなんかにつき合ってるほど、あたしたちは暇じゃないんだから。

ボーイ
きみの好きにすればいいさ。

彼らは旅を続ける。

砂浜を掘り当てながら旅を続ける。

その道中の一光景。

ガール
なんだろう、これ。

ガールは、砂浜の中からなにやらリング状のものを見つけ出す。

ボーイ
なんだろう。ハンドル、じゃ、なさそうだ。

ガール バスはここを通っていない。

四人は色々持ち方を変えてみたりするが、やがてしつくり来る持ち方を見つげ出す。

そしてボーイは、ゆつくりと、舵をまわす。

その途端、襲い掛かる波音、一瞬の青！！

トキ ……きいた？

ガール ……見た？

ボーイ いや、飛び込んできた！

テントマン ブーブ。

トキ 海、そうだろ。

テントマンは何やら支度を始める。

テントを崩し始める。

他の連中もそれを手伝う。

ガール　　いよいよ、この砂浜に別れを告げるときが来たのね

テントマン　　ドード

ガール　　何よ、違うの？

テントマン　　ンー。

ガール　　はっきりしなさいよ。

テントマン　　ンー。

ガール　　いいわ、そのうちはっきりすることなんだから。ボーイ、動き出したらその舵、離しちゃだめよ。

ボーイ　　動き始める？何が？

ガール　　だから・・・船でしょ？

ボーイ　　船？

トキ　　見ろ！この砂浜が・・・ママンの大陸から離れていく！

ガール　　・・・・・・・・聞こえてきた地鳴りは・・・・・・・・このときのためだったのね。

ボーイ　　ママン！！・・・もう戻れないのかい？

トキ　　泣くなよ。人間は誰だって独り立ちしていくものなんだ。

ガール　　巢立ち、自立・・・だけど悲しいのも確かね。

トキ　　きみたちのママンも、そうやって生きてきたんだ。

テントマン　　ユイゴ！

テントマンは解体した船の帆をボーイに渡す。

ガールはその帆の片方を草っぱの方向にかける。

そしてボーイは海の方角に！

トキ　　さあ、草っぱの方角から海に向って帆をかける。なん
だい、なかなかいい船じゃないか。立派じゃないか。

ガール　　終ったら戻ってきなさいよ。あんたが舵を取らない
んだったらあたしが舵取っちゃうよ。

ボーイ　　今戻るよ。

ボーイはもう一度、世界を見渡す。

ボーイ　　・・・よく見えるんだ。世界がよく見えるんだ。あ
れはママンと過ごした草っぱの楽園。おまつりの思い出。スナック・

メモリはあんなに近くにあるよ。ガール、ご覧よ。草っぱは今日も月の光に包まれてる。あれはあれで、あたたかくっていいものだったんだよ……ご覧よ……！

ボーイは、確かに見る。そこに、見る。

ママンは、草っぱの楽園から、ボーイたちを抱き締めて！

ボーイ　　ママンがいる……観覧車から見た風景だ。遠近感がなくなった。過去も未来もないんだ。ここには僕らがいるだけだ……トキ！僕は思い出した。思い出したよ、最後の魔法を……だから……僕は生きてゆけるんだ。

ボーイは、舵を手にとると、舵を切ろうとする、その前に、もう一度、ママンに精一杯甘えて抱き締められて。

ボーイ　　行ってきます。愛するママン。僕は……海へゆく。
あなたに教えてもらった希望を胸に。

最後の言葉はもう、波音に飲まれて聞こえない。ついに船は漕ぎ出した。

そして——草っぱボーイは、海へゆく。

幕

劇団 EFFECTS VOL.5 2002年3月30日・31日初演

上演希望の場合はメールで御連絡ください

natsukko@gmail.com